

## 芸術の完全性と真実

### Completeness of Art and Truth in Art

岡本 重温

#### はじめに

芸術、芸術作品に関して完成、完全性、完璧性ということを科学技術との関係で論じ、一方、美学の問題として、芸術における美と科学的な真との関係について、論究する。

芸術は元来、technē (ars) に由来し、技術と芸術の類同性、あるいは共通性も論じられるのは周知のことで、芸術にとって、技術の習得、技術の錬磨、技術の工夫発展も、直感的・身体的表現についても、科学的な作品制作法についても、完全性を求める精神が重要であることは否めない。

#### 第1章 完全性と芸術の問題

##### ①完全性、正確性

一般に、完成、完全性、完璧性、完全無欠、無謬、円満具足、正確性、絶対性、完結性等の概念は、お題目としても、意識されかつ標榜されることが多い。

芸術の場合は、音楽や演劇等の上演芸術では、演者やそのグループについて、期待されている水準が暗黙にあり、完成や完璧性、失敗の無い正確さ、無謬性等が特に強調され、自由な発想よりも、伝統様式等一定の枠内での完全な上演成果が期待される。

そのため、個人の才能よりも理想化された芸や芸能の発揮が求められ、達成度が問われ、それも、ジャンルや伝統の名による文化的責

務から、厳しい修業が前提とされ、完成は生涯にわたっての終わることなき追求目標とされる事が多い。

造形芸術等では、達成目標や、正確さや無謬性等が必ずしも明確に客観化されないが、評論や解説に際して、時々の評価や期待に込められているかという点や、前後する他作品との比較で、芸としての高さが評価され、一種絶対的な価値が論じられることがあるが、必ずしも正確さや表現の完成というようなことが基準とは考えられない。

しかし、芸術家、または、作品を制作する人は非常に多く、コンクールや、登竜門といわれる色々な機会もあり、公正を期する競争もあるが、作品の買い上げ、採用等にも絡んで、芸術家個人同志の競争意識や、ライバル間の人間関係等に抜き差しならない生活上の問題も生ずるかも知れない。

また、芸術家の人や作品についての噂、評論や芸術鑑賞に関する情報、スポンサーや鑑賞者、評者の存在、マスコミの影響力の増大、社会の政治経済情勢の影響等が、今や大きな要素になりつつあるが、偶然や不思議な巡り合わせもあり得て、有形、無形の競争が見かけよりも激しく、実力の競争という建前とは可なり懸け離れた、色々な競争等が生じることが多い。

むしろ、芸術は、ルール無き競争とも、絶対評価の出来ない、果てしなく、激しい競争とも考えられよう。いわば、お互いに我が道

をゆく気概で、堂々と振る舞う一面と、何にでも縋るような苦しい競争の一面もあり、人間として完成に向かうという意味での芸術の肯定的な側面ばかりではなく、浮き世に生きる人間の逞しさを育てる側面もある。

しかし、教育的に過ぎるかも知れないが、苦勞が人を造ということも芸術の競争に当てはまり、あるいは、天才や鬼才を生み出すのも、形にはまった完成指向ではなく、競争が、意外で、常識の及ばない人間業に繋がると見ることも出来よう。したがって、完成とは証しがたく、神のように高きものがある人間の才能によって、人間界に与えられることがある、とでも言うのが妥当かもしれない。

## ②完璧を期す技術と芸術性

造形芸術の一角を占める、写真や映像、画像表現等では、技術管理が高度であり、その芸術性や内容の面では、絵画のように、一定の様式的基準や表現形式的側面で、完璧に表現されたとか、間違いなき器用な表現と言われることは稀であろうが、技術面では、機械やシステムに関わるので、カメラレンズの描写性、解像力、コントラスト表示指数、画素数pixel、色の再現の正確さ、フレアーや歪曲の有無等は、機械的に厳密に測定したり、熟練者の判定を制度化したりしている。

それでも、ボケの味とか、表現が軟らかい、硬い等、数値ではない直観で述べられることもしばしばある。

したがって、科学技術においても、純粋に客観的な尺度や計測、計算の数値ばかりではなく、経験法則的に人間の感性や勘を尊重する部門もあり、また、味や好みに関しては、統計的な処理はある程度出来るが、特異な例や未経験の事象に関しては、事実を確認、記録するのみということもある。むしろ、人知としては、完璧な基準や法則が永遠に導出できないこともあるのが真実といえよう。

芸術の完全性を例示し、その本質を論じる観点で、古代ギリシャのXenokratesのakribeia(鋭さ、正確さ)という概念は、akis鋭いもの、と、akron頂点から派生し、後世の

伝承によると、Phidias, Polykleitos, Lysippos等は、表現のakribeiaの点で評価され、「正確な仕事の芸術家」と呼ばれ、彼らの職業的プライド、芸術としての自負心を反映している。<sup>(1)</sup>

仕事振りも、その作品も含めて、正確で、完璧な造形と、それを可能にした知性で、完全性を目指したと考えられているのである。あるいは、正確さとともに、想像力を介した相応しさ、ということが主張される場合もあり、たとえば、紀元後3世紀のPhilostratusが、‘TyanaのApollonius伝’で、fantasiaとmimesisの関係を鋭く論じ、神のイメージの適切な形成や、後世の超現実的表現にも通ずる、想像力の重要性を主張している。<sup>(2)</sup>

また、プラトン以来論じられている、idea, eidosとeikon、模像、似像、とその間のmimesisの正確な模写、実物、モデルと画像の存在、信頼性の問題等がとくに重視される。完全な似像を求める精神と、移ろいゆく現実の記録、さらに、想像力fantasia,あるいは合成も含めた構成、あるいは人間による現実以上のもののimaginatioにおいても、完璧な表現を目指し、芸術としての完成を期することになる。

## ③鑑識眼、目利きと芸術活動

あるいは、芸術の鑑賞・享受についても、人間の美的、芸術的素質としての鋭い眼の感覚、眼識力、目利きや鑑定能力も、歴史とともに、芸術の多様化につれて次第に高度で、微妙なものに関わる必要が生じ、やはり、評論、鑑賞の面でも、正確、完璧を求め、正しい管理とその種の能力の完全性を想定する。あるいは、後補や修理の事実と作風の分析、ニセモノ・本物の見分け、欠落部分の推理、年代、材質等の評定もX線やアイソトープを利用した技術問題もあり、科学的に実証出来る場合もあるが、経験的な肉眼判定によらなければならない場合もある。

作品を創造する芸術家、芸術活動者にしても、手先の器用さだけというのではなく、鑑賞能力や、美的判断力、歴史や、地域的な多

くの作品の知識もあることが望ましく、完全を目指す作品制作には、他作品の知識や情報以外にも、あるいは教養として、思想性或科学知識、人間社会の知識、思慮深い判断力等が背景にあり、無限の内容を目指す姿勢や努力が期待されるであろう。

また、完全性を標榜して、完璧な作品を心がけても、神の創造や自然の力に比べて、人間業の限界が強く意識されるのは当然とも言えようが、超越的存在を念頭におく中世のスコラ哲学では特に顕著であり、その影響が残っていたルネッサンス前期の哲学には、ニコラウス・クザヌスのように、ソクラテス以来しばしば語られる、人間の無知という認識、人間の能力の限界を論じ、特に神の創造に対する人間の創造性あるいは、想像力を究明しようとした例がある。

また、科学思想と現代科学技術に関して、素粒子の解明や、精密な物の製造や、研究開発において、精密性、厳密性の技術課題から、常に厳しい競争がある。これらに於いても、完璧を期し、完全性が目標とされるが、完結はあり得ず、技術の無限な追求が続けられることは言うまでもない。

なおまた、科学技術関連で、情報処理や、情報伝達の機能向上も、厳格な管理の下で、効率の向上と過誤の排除、騒音・雑音の排除、克服が求められる。

#### ④情報に求められる正確さ

一般に、芸術は情報そのものと認識される場合は少ないであろうが、情報システムやその機能は、芸術の、とくに、絵画や映像芸術、言語芸術と極めて類似しており、現実にも共用され、共通性が論議される。

芸術において、ミメシス的な正確な再現性が芸術価値、芸術目的とされる場合もある。また、A.Môlesのように、情報は本来記号、意味的伝達システムであるが、複合的に、記号的情報に美的情報が併存しており、文芸や音楽の例をあげて、確実な表現伝達があって初めて、全体の良さや作品の価値が発揮出来るのであり、逆に、記号・意味だけの情報にし

ても、美的な印象を生じ、情報を論じるときに美の問題も看過出来ないと主張する人もある。<sup>(3)</sup>

情報という観念は、昔のように神のお告げと考えられない限り、また、自然発生的な生物情報、物理現象情報はさておき、一般の知識生産と伝達を意味する場合は、人為的で、契約や、検証により、人間業の範囲で、かつ正確無比のものと見られ、間違いなく、正確で、迅速なメッセージの伝達や、科学的データの伝送や交換等が完全に達成されることが期待される。

伝送内容においては、遊びや、冗談等もないではないが、与えられた事実を主観ではない真実として知識体系に組み込む営みである。ウソはウソのまま、形式では正確に伝わるべきもので、個と個との対応で、写像性が重視される。

しかし、情報類似の、伝達、記号過程として、シンボルやメタファーによる、あるいは、皮肉、イロニーといわれる内容がある場合は、情報であるから、真実、完全なものを前提とするということと、必ずしも相容れないであろう。やはり、芸術にとって真実とは何かという問題に関係するといえよう。

## 第2章 芸術にとって、完全性、完璧性とは、どう捉えるべきか。

### ①芸術に想定される完成と完全性

一般に芸術活動は、科学的基準、とくに数量や数値あるいは数理から独立して、自律的で自由な人間活動と考えられているが、具体的な芸術制作や鑑賞においては、科学の諸法則や、自然の原理に反しては成立し得ないし、科学的真理との相違を唱えても、生命や人間行動そのものの条件から逃れられる訳ではない。

科学的な物性を無視したり、社会秩序や慣習に反対するような革新的な芸術でも、常に破壊や自殺的行動で芸術が創造される訳ではない。

また、一般に、物事の完成ということは、科学技術においては、普遍的な目標達成や、技術的課題の解決、あるいは結果業績の客観的な評価等で、立証されたり、発見が認定されたりすることが常であり、一定の条件や限られた領域において、ときには、検査や評価作業で証明、鑑定、計測等の手続きを経て、完成した、完璧になったと、万人に認められる場合が多いであろう。

また、中世の神学ばかりでなく、天地創造、神による世界創造等の観念であれ、常識論であれ、人間を基準にして完成に向かうということとはできない。あるいは人間業には完成や終局があり得ないと悟って、神の創造より低い次元、段階の変成や加工、せいぜい、創造を真似た想像力の発揮が出来るに過ぎないと考えられがちである。科学においても、人間が何時の日か自然をすべて征服し、宇宙の仕組みも全部理解し、さらに、自然を制御しようとする様な思い上がった自惚れは、神を冒瀆し、自然の恐れを知らない浅はかな人間至上主義と見なされるであろう。

自然の法則を盗み、絶対者の力を得ると想定しても、人間も被造物の一つであり、動植物にしても、ある程度自然を動かす力や、自然環境を変える能力を持ち合わせ、また、人間ではどうすることもできない力を人間に向けてくることもある。

絶対者である神との比較で人間の能力や可能性を謙虚にみる限り、科学が発達しても、宇宙や、マクロ、ミクロ世界やあるいは大自然の秘密がすべてが解らず、身近な人間的現実すら誤解や不可解な現象が付き物であり、超常現象や、奇跡といわれる、科学の常識を越えた域まで考慮しても、完璧に出来ないのであれば、別の面から、奇跡を期待することも起こり得るであろう。偶然の僥倖を期待する祈りや古いや神懸かりの秘術等といわれるものが世間には多くみられる。

ところで、大それた世界観は問わずに、俗世の人間が、日常のものを基礎にして描写や造形等のレベルで行なう、制作・創造性のみ

られる、人間による普通の芸術に限定しても、完璧な創造ではなくても、創造のシミュレーションとでも言うべき、芸術創造活動、創作が考えられる。古代のpoesis, ars poeticaが、新たな創作の完成や完了、制作の終結等が実際にどう考えられ、また、現代の知識において、制作や創造、想像力の発揮が、どのように完了し、完成したと認められるかということも問題になるであろう。

poesisとしての創造性、独創性が発揮される場合や、模写mimesis, あるいは共有methexisとしての、再現や描写の表現活動、それによる作品制作においても、人間業の期待されるレベルや、在来のを越え出す超出性、新記録達成に似た成功は、表彰されたり、記録に留められたりして、完璧な成果とは言えないにしても、相当な満足に関係者にあたえるであろう。

もっとも、現実には仕事や課題が終了し、完成し、芸術の完成あるいは人間完成という比喻で、社会事象あるいは教育事業として高く評価されることもある。多くの場合、人並はずれた努力や、命懸けとも言われる経験を経て、技術の高度の発揮、無限の目標や、巨大な目標に向かって、完全性を求めて身を以って挑戦したと評価される。身体的にも、精神的にも、ぎりぎり迄やったという満足感と、それを讃える心情が人間的に共感されるといえよう。

また、何が何でも、大きく、高いものが歓迎されるとは限らず、小さいものや、可愛いものとして、別の価値が認められることも多い。したがって、常に、高い完成度を目標とする技術の完成度とは違って、芸術に関しては、生で素朴な性質、素朴な感じや、原始的なものが評価されたり、時勢の因子や賭けもあるが、ある中間段階のものが魅力があるとて人々の関心を呼んだり、はじめから、作品の完成度や技能の完成を問題にしないこともありうる。

また、評論者の純粋な感性が尊重されて、個人的な判断が表明されたりすると、完成度

に関しても、ことの優劣あるいは合否等に関連して、科学的根拠を問わずに、卓越した評論者の好みや凡人に解らない見識と見なされるか、凡人の判断を越えた美の発見と言われたりする。

とくに、科学技術と密接な物体の扱いや、機械や道具の使用や、あるいは精神機能に関連する身体、精神的な芸術活動も多い。科学的な原則としての、ものの始まりと、終了、途中の課程の管理を無視した、出たところ勝負や、いつも自由奔放な偶然的な気儘仕事で済むとは思われない。起承転結といわれるように、芸術においても、ものの始まりやけじめが、重要な要素とみられることも多い。

## ②技術としての厳しさと完璧性

芸術を技術と捉えるとき、人間の身体の関係する事項は多く、感覚器官の訓練や、筋肉や精神機能の訓練等、巧緻性や器用さの錬磨等で、正しいといわれる形や規範や、間違いの例が厳格に示され、かつ個人指導されるとき、事によると命懸けと言われる様な厳しい修業や、人間能力ぎりぎりの苦しい挑戦が伴う場合もある。人間身体と精神そのものを使う芸術の厳しさ、無限の挑戦の実情をみれば、完成や完璧ということはお題目ではなく、芸術の厳しさそのものを物語っている。

しかし、あえて厳しさを否定したり、セックスや特殊体験を掲げて、甘美なことや人間の享楽面、愚かさの露出、動物的猟奇、等の強調により厳しく鍛える人間の感官や、道徳的理念や、節度等を芸術の名前で、反逆的に否定し、冗談や、諧謔的感性に類似した、表現やパフォーマンスを試みることもある。厳しさの裏の安易さだけではなく、恍惚的に生きる気分を作り出したり、底抜けな生の謳歌とでも言うべき悦楽、芸術のための芸術の悪例を開く様な一見芸術らしき、芸能活動もあり、芸術と認めるか否かは別として、厳しさを唱えれば、人間の性として造反的な厳しさとでも言うものが付きまとうであろう。

それでも、技術や芸術等において、個別的で、独創的、生産的な仕事をすることは実際

厳しいことであり、むしろ失敗の可能性が高く、技術的に失敗しないように管理し、精神を陶冶して、想定される障害に備え、問題点を克服して完璧な水準に近づけようとすることになる。

たとえば、伝統芸術で、家元や、流派団体が、厳しい条件や、ときには非人間的な高い目標を示して、権威を保持しようとするのも、個人の限界の認識のみならず、芸術活動の完全性や、絶対的な、しかも永続的な無限の進展を期することが、了解されねばならないが、案外不純な動機が入ることもあるので、金儲けや、権勢欲に気をつけるべきである。また、芸術の絶対的な完成ということは、芸術を神や自然の創造活動ではない、人間業と考える限り、あり得ないということかもしれないが、芸術作品の制作仕事の終了、あるいは作品納入、設置、あるいは作品の物的出来上がり状況の認定、発表活動その後の鑑賞等に関する芸術的存在の問題ではなく、技術的観点から技術の発揮が十分であり、結果が社会の批判に曝されることがあっても、それが、制作の完成と断定できないことが多い。かりに、ある条件を付けて、締切や、終了宣言がなされて、それ以上の仕事が不可能になっても、一生の間に作る作品数を限定したり、その時をもって一切芸術活動を停止したりしない限り、作品一個の完成は、芸術活動の一里塚の様なもので、さらに長い芸術人生の基礎や出発点になり、また、個人の仕事を越えて、様式を継承したり、偉大な先輩に学んで、様式、作風伝承に成功して、ある高レベルに到達したことを明らかにするという場合もある。

一方、人間の資質としての技術力の関点から、技術を研ぎ、常に向上、成果発揮の状態であっても、目標は限りないものであり、人間一生学び、かつ技術の向上発展を続けるべきであるという精神論に帰し、技術の定義如何に関わらず、芸術も技術と見なせば、一生技術を修練し磨く努力を続けるべきであり、本人の引退声明や、ドクターストップ等の生活関連の問題はさておき、妥協や怠慢的な衰

退や前途放棄は許されないというのが常識と考えられるであろう。

それゆえ、技術としての芸術であれ、芸術作品の制作や作製であれ、完成とは、他の分野で、区切りを求める社会契約や、常識の慣習と同じレベルで論じられないのはいうまでもなく、芸術性、美的内容の飽和的な満足や、感性的な充足感の美的体験の成立、理屈を越えた直観的な達成感の成立、あるいは生の喜びの自覚等、色々な場合が考えられるが、超越的な個人の満足体験や、予期しない精神の高まり、絶対的なものへの近接感、征服感、高いものとの一体感、共感的な無限の信頼等で、次第に、精神世界の高みに引き入れられ、絶対ではないが、これ以上は望まないという充足の境地、神懸かりや一時の恍惚的な陶醉といったようなことが、思考に上ってくるとでもいえようか。

常識として、技術は高く、完璧なことが望まれるが、人間にとっての限界も知られ、努力する個人の意気込みにも緊張持続の限界や体力や物的限界も生じがちであり、また他からの力が作用して、妥協を図らざるをえなくなることもある。つまり、人間として、人間であるが故の限界を認識し、悟ることになる。機械の性能維持ではなく、人間業の管理、能力発揮、そして、求められた技術仕事を一応達成することを、他の領域での苦勞に対照させて、苦勞は多いが生きる喜びや、色々な制約を逃れることが期待される芸術活動として、技術の望ましい陶冶と成果の発揮と見なされても、厳しさが緩和するわけではなく、好きなことを趣味的にやっているの、楽な営みと思われては困る場合が多いであろう。

### ③技術的精度の向上と究極の成果

さらに、ミメシス的再現芸術では、厳格な形や色彩の把握、表現が望まれ、モデルと描かれたものとの同一性が強く望まれるのであり、akribeia的な表現として高度な模写性、迫真的な完璧性が望まれる。

芸術表現に限れば、科学的な対象、モデルの研究も含み、技術の最高度の発揮による、

芸術表現の完璧さが極めて重視される。

このことに関して、プラトン以来、世の論争を掻き立てた、実物とそれに迫る似像、見せ掛けと本体、あるいは、表現されたもののホンモノ性とニセモノ性の論義は、芸術と技術双方において、人間業の可能性と、尽きることのない追求の実態を考えさせる。

これで満足で、完結したという模写や模倣再現は殆ど考えられず、古くは芸術技法のみの改良進歩、高度の目標達成の問題とされ、近世以後では、自然科学や、科学技術の発展、開発につれて、科学万能を信じる風潮で、現在では、まだ不十分とはいえ、将来はすべてが解決されて、神業と同レベルの描写や再現が出来るかのごとき幻想を抱かせる論義もあり、現実にはカメラや複写機械の性能向上、精度の達成により、新たな可能性が生じ、似像論義以上に、文明の利器による、技術と芸術の双方に寄与する可能性も想定されるが、人間あつての機械であり、人工のロボットであれ、人工知能であれ、人間のレベルで発明され、使用する主人は人間である。

あるいは、偶然や、セレンディピティー現象<sup>(4)</sup>や、ランダム事象が注目されても、人間の知恵や認識の産物であることは変わらず、機械的必然の装置や精度を使って意図的に、生産活動をする枠内での、人間のコントロールを越えた部分の処理法を考えるべきであり、完全性の追求に反する、でたらめな非科学的、邪教信仰的な魔物ではないであろう。したがって、芸術と科学技術に共通の、作品、製造物の精度の目標と達成度は、プロの作品として、限りなく向上が求められ、マイクロ・ワーク工作として表現の微細さ、精密基準の達成、工作精度の向上等の形で物的精度として示されることが多い。科学技術、芸術制作、あるいはスポーツも含めて記録が競われることが、技術や芸術の可能性と現実の達成記録として、いわばギネス・ブック登載事項として扱われる場合がある。

これらは、常に機械技術と人間の器用さとの両方のレベルで論じられる。あるいは、マ

クロ的に、どれ程巨大な構造物が可能か、どこまで記録を更新する力を有して、かつ実現されるかというようなことで、人間が、環境の制御や人間相互協調に失敗しなければ、予想を超えて技術の精度は、完成はなくとも、向上し続けているといえよう。しかし、人間の所為で、抗争や、無秩序な開発等が暴走すれば、自殺行為として、技術の停滞、芸術の腐敗、等が生じて、元来が完全性指向の望まれるのに、完成指向に反する事態が想定されるかもしれない。

#### ④不可測の技術、芸的人間能力の目標

いわゆる感性の鋭さ、創造活動における正確さとみられる個人感覚の正確な鋭さとも言うべき、目利き、鑑定眼、繊細感覚や、手の器用さのパフォーマンス等は、芸術を人間本来の技術と見なすとき、一生涯にわたる技術目標であり、個人差も大きい、専門家の競争の下で、コンクリートの状況が生じやすい。しかも、数理的、形式的基準の無いのが常であり、天才的能力や、努力家の教育物語として、称賛されたり、期待されたりする。多くの場合に成果である作品や発表、報告、記録等で、世間的に証明、披露されるが、今までの中で、一番とか、未曾有とかいわれながら、それを上回るものが一方で期待され、一方でその達成成果を一時的にでも、最高位として称賛する傾向になる。記録は破られ、トップは永久ではないと思われるのは当然で、勲章を与えて、その時までの労をねぎらい、誉められると同時にライバルを鼓舞することになる。

実はその間の芸術家、技術保持者の内面の精神の葛藤や人に言えない個人的苦勞が大きくても、技術を無視して人間の性格や、親切であるとか、美人であるとか技術に無関係の評価等を考慮するのも無理であり、人柄と技術の両面を見極めて、なお、専門的に技術中心の評価を考えざるを得ないであろう。

その限りにおいて、技術の完成は一生かけた目標であり、自ら、完成したと宣言する人はいるかもしれないが、人間業である限り、

絶対の完成はなく、しかも完成を目指して努力するのが人間といえよう。

社会的には、表彰制度や慣習により、よい仕事、画期的な作品を作ったということで、仕事内容や、厳密な作品の比較を伴わずに、何があるか知らないけれど、有り難そうな成果があり、内容面の完成よりも、名声だけ、あるいは、金銭面の利得となり、完成目標が全くすり替えられて、仮そめで、見かけだけの、あるいは徒花的な成功だけを望む事態になることもあり得る。

ものごとの完成とは何かという大きな幅広い問題になるが、技術や芸術の枠外となれば、真の完全性ではなく、ある条件下の基準や、仮の栄誉基準での、いわば、マスコミの報道や商売品にすぎない場合も多い。実際ウソや誤魔化しの多い、生臭い俗事というべきことの優劣や、区切りや、儀式絡みの物事の産出と、美や真実を内容とする、技術や芸術との混同は避けるべきであろう。

#### ⑤芸術（作品）の完成と未完成

未完成とみられる芸術作品は多数知られており、未完成に終わった運命や、関係する戦いが色々な物語主題になったりしている。バルザック作の「知られざる傑作」Le Chef d'oeuvre inconnuの隠し通うされた画布の話や、制作中、スケッチ中に命の燃えつきた人の話もあり、また、芸術史の観点で、構想と作品実現、表現活動中の精神の緊張や未完成に終わることを余儀なくされた芸術意志や、あえて未完成のまま放置したこだわり等に、人間的苦悩が読み取れる場合もある。

J.Gantnerその他の人が取り上げている、ミケランジェロや、レオナルド・ダヴィンチの作品制作の例で、無限に追求する芸術意志、命を懸けて限界まで続ける精神を指摘しても、芸術の完成はあり得ず、未完成の魅力、完成一步手前の瑞々しい若さ、余情のような、完璧に至るまでに残された微妙な期待感、若さの魅力といったことが未完成作品の鑑賞にもなって、心を打つ魅力となるであろう。

あるいは、音楽や演劇、舞踊等の上演芸術

では、楽譜や、脚本の通りに全く間違いなく演じて、技術的に完璧であったとしても、しばしば、演者も満足せず、評論家から、寸分の間違いも破綻もなかったが、曲想や、芝居の心、原作者の意向が反映せず、作曲や原作の精神が活かされていないと評される場合が多い。

これらの場合は、上演の都度、完璧な表現パフォーマンスが求められても、人間が演じる限り、完璧なことは不可能で、演者や役者の技量やその道の見識等が大きく支配することは避けられない。むしろその事実、無限の改良発展の期待があり、演者の新たな個性の輝きが期待される。さらに、ジャンルの芸術性、日常的能力の限界、演じられる環境等で常に流動している表現条件、観賞者の資質等の影響もなしとしない。

古典的様式芸術、たとえば、伝統歌舞伎で、いつも決まった場面、台詞、仕草、衣装や装置等が全く変わらないにしても、毎回、新しい演技や精神が期待され、家元や役者の常なる向上発展が望まれている。伝統は停滞が許されず、形の決まった中での創意工夫は、秘められた真実のごとく、芸の成長に伴って役者の心の内面が創造的に滲み出てくる事が期待されるのではあるまいか。

#### ⑥情報の完全性の期待と言外の情報

技術一般にしても、芸術的表現にしても、何かを組織的に伝達し、伝達の減衰や途中の変化が無いように管理するとき、正確で、説得力のある情報活動は、完全、完璧を期し、厳格な管理と基準の保持を心がけて、伝達、記録、内容の処理を図る。この際も、人間的技術と科学的方法の乖離は望ましいことではないが、個人的な内容や、精神世界の事象は、記号過程を主とする情報構成や伝送管理では、完全、完璧を建前としながらも、個人差や、形式を越えた感応性や、突然変異的な情報内容の変動や崩壊には対応できない。いわば、情報発信までは、厳格に管理され、途中減衰や変動を防ぐ手段を講じて、人工的な技術情報過程であるかぎり、絶対の品質保証、

完全なる情報の完結はむづかしい。

ましてや、受手の解釈、解読能力に限界があり、言語機能的問題が生じるのが常であり、情報の影響力とか、思想的影響等は、マスコミの生み出す問題にも絡んで、情報の力、ときには、悪影響力も想定される。

したがって、情報の完全性や、力に関しては、前向きな進歩向上とは限らず、程々で、実際に正しく情報が生かされるという関点で、言論の自由の尊重は当然のこと、節度や適切な力の評価と発揮が望まれるのではあるまいか。ウソ、ハッタリ、誤魔化しに騙されやすいことや、人間の劣情を刺激する内容が現われやすく、情報は正確で、迅速でなければならないとはいえ、それを求める側の姿勢にも問題があり、元来、科学情報のごとく、最も正確で、完全な管理が望まれながら、効率や精度の向上、スピードの向上には、科学技術一般の開発、改善の進歩の歴史がある。しかし、情報が如何に完全で、効率がすぐれていても、音楽において、作曲の楽譜と演奏者の関係のごとく、情報を享受し、内容を解釈するのが、人間であれば、情報に伴う美的感性や、読み方の違いは生じることを避け得ないであろう。

常に機械語が信号を流し、機械的に記号が意味を伝送するのではなく、生活の掛かっている人間が、それまでの知識や経験にも照らし、文脈を吟味して、ときには、主観的な想像力や独創性を働かせながら、何かの目的に合わせて情報を活用する姿勢で、しかし、恣意ではなく、客観性を尊重し、知識の活用、知識生産の観点で、いわば、表面的な機械的情報と、秘められた情報、含意された内容が、情報の完全性を越えた問題を生み出すであろう。

### 第3章 完全、完璧性と美の問題

#### ①トマス・アキナスの完全性と美

先ず、なぜ、今、中世の神学色彩の強いトマスに注目するかといえば、完全、完璧性



の純粋な、存在論問題と、規模の大きい宇宙世界を舞台にした包括的な観点を参考にするのが、このさい適切と考えるからである。

前章で、科学技術、技術、芸術の完全性を問う観点から、人間業である限り完全性、完璧な仕事は達成が極めて困難であることを、多方面から論じた。また、バウムガルテン、カント以来近代美学が成立すると、学問の独立や細分化の傾向で、美の問題は知性、理性と一線を画した感性の観点から論じられるようになったのは周知のことであろう。現代では、完全性、完璧と美とを同一の枠で論じる環境は成立しがたく、完全性の概念は、近代科学論や数学的論理で、完全性、不完全性の問題として論じられている。

あるいは、19世紀後半頃から近代の科学技術が発達すると、科学万能の思惑から、実証性の絶対視や、観測、実験の膨大なデータを駆使した計算や推論の尊重が益々盛んになる。さらに、美に関係深い直感や勘といったようなことが、非科学的なことか、超越的な特殊行動と見られたり、宗教の相対的な勢力の衰退もあって、見せ掛けの合理性が幅を利かせ、ごく局限された芸術活動の専売のように見られる傾向も助長されていた。

歴史的には、信仰と哲学の関連が、多くの論議を呼んだ中世スコラ哲学の時代、哲学と自然科学の分離が眼に付く19世紀が節目ともなろうが、分離独立、厳密な峻別こそ、完全性や完璧性の論義に必要なかもしれない。

しかし、人間本来の複雑な精神活動や、運命や予測不可能な事象も多いことから、新興宗教が発生を続けるという現実もあり、結局人間は大自然の前には小さな存在であり、解ったと思っていることも怪しい事が多く、何時になっても戦争や地域紛争の抑止もできない現実を勘案すると、分離する方向のみならず、総合的に全体像を求めた中世の知恵も借用できるのではないかと考える。

古くは、9世紀頃のJohannes Scotusのように、美とは交響性Symphoniaであり、神顕Theophaniaを反映し、本来は不統一であり

不可視なものの形が神の摂理によりイメージとして示されるという趣旨から、完璧な形で顕れるべきであり、いわば、完璧性が美であると明確に主張する先例もあるが、トマス・アクィナスは、当時の思想を代表する神学的基盤で、もともと神の天地創造があり、天界の遙か下の人間界の感覚的な美的体験の内容としてではなく、宇宙・世界の全存在と神の恩寵の顕れとして、我々が美を享受する観念を、知の認識の形で説明している。<sup>(5)</sup>

トマスは、美の要因として、claritas明白性 debita proportio適切な調和 integritus完全性をあげている。<sup>(6)</sup>

トマスのこの美の性格はSumma Theologicaその他で、幾つかの部分に別れて説明されているが、人間が達成を目指して努力する目標というのではなく、神の創造で実現すると考えられる理念的なもので、いわば、純粋な結晶のように堅固に固まって、宝石のような輝きを有し、透明性や、限りなき光を発する、完璧な球形の世界の円満で欠如無き本質のように説かれている。まさに、完全性が美の主要な因子であり、不変不動の徳性でもあり、明白で、完全であり、輝かしい光を放っているのである。

したがって、象徴的モデルが考えられているが、図式的に形を示すよりも抽象的な存在として、すべてを具備する完全性integritusが、明白に光り輝きclaritas、さらに調和がとれたharmoniaが適切なdebita状態にあるというのであるから、まさに、完全に纏った状態で多彩な光を放って輝いているということになり、地上の俗世界ではなく聖なる世界の表象として、完全無欠であるが故に即美として認識、感得されるようなことになる。

integritus, claritas, debita proportioとまるで三位一体のように揃って、聖なる世界の感覚に訴えるものが美とされると、俗界の技術やその産物である芸術作品とは距離を置いたものに見られても、神学の体系、アリストテレス的、プトレマイオスの宇宙観に、中世の信仰、神の存在観等の背景から、人間業の

問題よりも、崇高な聖なる世界の存在的観照が求められたことが偲ばれる。

実際、トマスは、音楽は本人も嗜みがあり、当時の教会では儀式の際などに重要であったことは当然であるから、他のジャンルの芸術とは比較にならない程尊重されたが、一方で、元来、偶像を排する宗教の伝統に、異教イスラム教も絡み、ビザンチン文化での聖像論争や、聖像破壊の歴史にみるように、造形美術は、中世では停滞して形にはまっていたと一般には見られるが、建築は様式の変化や地域性を受けて発展していたといえよう。ビザンチン様式以来、ロマネスクや、とくにゴシックの教会では、壮大な神の家としての伽藍・会堂を建設してきた。

クリュニー修道院系のHugo de St.Victorのように、我々の精神は、不可視の真理へ直接上昇することはできないので、神の家として献堂される教会堂は、最高の職人の技術でそれに相応しい装飾、荘厳に努めるべきであり、人間の創造した美術を媒介して神秘的な体験が成立するような意味での、昇越法 *anagogicus mos* が必要であると説かれた。<sup>(7)</sup>

そして、豪華に装飾した伽藍や、モザイクや、ステンドグラスも含めて絢爛豪華な内装の例がある一方で、精神主義から、12世紀頃のAbelardやBernard de Clairvaux等は簡素な集会場所さえあればよいとの説で、虚飾は目障りで信仰の妨げになるとの反論もあり、論議を呼んだ。

あるいは、建築や工芸等の造形作品や生活の美学は、高尚な聖世界のものと考えられず、職人仕事、封建世界の城下の片隅か、城外の村落の営みと見られたかも知れない。画家が、絵の具を調合するからとて、医師と同様に見られたのは、むしろ興味を引くが、ルネッサンス以前は、職人の地位もそれ程ではなく、聖歌隊のような芸術と造形美術の見られ方も現代とは随分異なることを考慮しなければならないであろう。

また、神の姿や、神性の可視か不可視かという問答もあり、神顕や聖霊による奇跡、信

仰上の秘伝等の大きな背景があったことも考慮しなければならないであろう。

とにかく、神に近付きたい人間が俗界を離れて超越的に、聖にして、崇高な精神世界を求める心情は、信仰そのものは言うまでもなく、日常生活においても、敬虔で謙虚に振る舞い、欲求を抑さえて只管神の御意や摂理に期待する心情が支配的であったと推定される。裏話や例外的な神を畏れない悪業や、色恋い沙汰も伝えられており、現代人が考える程では無かったかも知れないが、俗世の満ちとしての美よりも、天国的な超越世界を観想するときの美意識が説かれたともいえよう。

Umberto Eco等によると、色々な抑圧や生活の苦勞もあり、自由に体験できなかったであろうが、中世の人の素朴さ、純粹で土着的な点から、光や色には敏感であり、光や色彩が精神的現実の *metaphor* と見なされるべきであり、ステンドグラス通してくる光で、神性を光で象徴する思想が醸成されたと主張する人も多い。<sup>(8)</sup>

あるいは、Robert Grossetesteは、光やプロポーションの理論で、光を中心に数的プロポーションを追求し、単純な事物や現象の最も完全な統一が全体の調和を創りだす故に、光が事物を美しく見せるということで、元来宇宙論に発するが、色彩キュビズムとも呼ばれるように、光の形而上学として完全な調和が美である説いている。

トマスは、Grossetesteや同じくオックスフォード系のW(V)iteloの光学や色彩論も参考にして、単なる視覚ではない、視という觀念を説いている。視 *Visio* は先ず視覚 そのものを意味するが、高い品位の視覚や、確実な視覚は、その名辭が拡張されて、すべての他の感覚から、最終的には精神的な知的認識にまで拡張されるという。したがって、視が成り立つことが美的認識の要件である。

現代の学者は、視 *Visio* は *Vision* や *Opsis* と区別され、視覚を超越した抽象的知的認識と考える人が多く、*intellectual cognity* の一種と説明される場合もある。

トマスは、Visio corporalis, Visio beatifica, Visio aethetica等と示している例がある。<sup>(9)</sup>

トマスは「神学大全」Summaの初版の頃は、快感、見て快いものQuae visa placetを美と論じ、同書第2判では、快なることの知覚cuius ipsa apprehensio placetが美しいと述べている箇所がある。

トマスによる知識の種別は、第1に、感覚と感覚対象との直接の出会いによる。第2には、知性と感覚が供給する想像上のものとの出会いであり、このものは抽象の形を取る。知識となる内容は統一的な知性に刻印することで概念を生み出す。これらが瞬時に行なわれるので、一つの行動に見え、抽象、想像、総合との照合が生じ、判断が生じ、科学知識が成立する。感覚が我々に直感認識を与え、知性が普遍的知識を与え、それらが合体したものを、視Visioとして認識することになる。なお、トマスは、人間の知性が直接に感覚的对象に結びつくのは不可能と考え、もっと上位の高い知性、すなわち、神や天使に帰せられるべき知性を想定するので、統一的な高い知性の示す、完全性や調和や明白さ等が理想とされる美の理念であり、前述のように、結晶された完璧な層的球体の中で、調和が取れ、色々な光が輝く世界像を想定し、緊密な完結体であり、美を論じる際は、消去的に他の因子を排除すれば、その完全体に美的なものだけが残るというような解釈も可能かもしれないが、壮大で、深遠な体系で、厳密な言辞を弄しているので、Visioと言うことを手がかりに、美の因子として示されているものの組合せが、完全性であり、かつ美を意味するという一面をみるだけである。

## ②ルスの術とニコラウス・クザヌスの人間による創造論

トマスの少し後に、カタルニア出身の異才Raimundus Lullusが出たが、多少本論に関係があると思われるので、触れておきたい。主著Ars Magnaで基礎概念の数理的結合術の開示、真理発見術による知識生産法を説き、

異端者教化の必要から外国語教育を構想し実際に学校を設立し、自らは、錬金術師とも見られ、エンサイクロペディア編集、科学研究等で異才を発揮し、ルネッサンス期のニコラウス・クザヌスや、一面では後世のライプニッツの先駆者と見られたりしている。<sup>(10)</sup>

彼の芸術論は取るに足りないようであるが、先のトマスが、美の問題を全存在のレベルで見ようとしたように、世界全体像の中で、精神的認識、抽象概念において、想定されるあらゆる事象や概念を集積し、組合せ図表化を試み、普遍的統一原理を示そうとする。

美学的には、トマスの完全性を示す概念のように、美と善や真等の区別をするよりも、すべてを包括するものとして、宇宙や自然や人間のあらゆる層や種類に普遍的な図式をつくり、相互関係を分類的に論じている。

先のトマスの観念では、美も含めて、すべてを包括する大結晶体の完全性というモデルが暗示されていたようであるが、ルスの場合は、壮大な規模のマンドラとでも言うべき、多層的で全方向に作用する知識世界図、組織図が考えられていて、全体真理の部分的現れとしての、美や善や、論理的真を個々に論じるときは、いわば、消去法的に必要な徳目を残して、他のものを一時的に排除するか、括弧入れして、作用しないようにし、必要な一徳目アイデアを探求するような形が似つかわしいと、比喩的に言えるかもしれない。

トマスと彼と両者に共通する点では、先ず神の創造した全体像があり、完全なる存在が予期され、絶対者を頂点に、ヒエラルキーが構想され、全宇宙を象徴するような結晶体、あるいはマンドラ的な強固な纏まりと、相互関係が表象する真の存在に秘められた力が説かれる。そして、そのことを信じさせる信仰の指導や異端者説得は、全体的な視野で存在論哲学を理路整然と論証することを基とする。トマスと共に教会の権威を傘にきた形式論や、儀式の実践を主とする古い形の宗教学からの脱却、学問としての宗教哲学、世界観開示というような点で、スコラ哲学を代表す

る思想である。

さて、ルルスの場合は、言語学、数学や天文学の素養もあり、秩序概念を中心とするアルファベットの、レパートリー集を基礎に、天体の運行、占いの巡り合わせ、とくに、人間の感性や感情行動関係の項目も多く含まれ、愛情、美食、憤怒、意欲等、Virtus, Vitia等、同一性や比較基準の層序性、本質、統一、完璧性等の絶対者の基準等が、論点になり、天体的モデルで、全世界を象徴し、宗教活動ではあるが、世界像で、美をも含めて、完全、完璧なものの在り方を説く方式であろう。

次に、ルルスの影響ありといわれる15世紀の哲学者、Nicolaus Cusanus, または、Nikolaus von Kuesであるが、ドイツのモーゼル地方の出身で、主としてイタリアで活躍した人で、時代はルネッサンスの花が開きつつあったときであるが、スコラ哲学の神学の下で、芸術や物品作成について、芸術学的にも興味ある論説を展開している。

ルルスの直接の影響ともいえないが、壮大な天文学的図式から、神の偉大さ、超越的絶対性を示す形ではなく、神の恩寵により、万物には自然的なある欲求が内在しており、人間はそれを認識し、自分の本性の制約が許すかぎり、最良の在り方で存在したいという欲求があるという、最良観を先ず説いている。彼の主著として知られているのは、「知ある無知」Docta Ignorantiaである。一方で、短篇として、美学、芸術関連のものとして、精神論De mente, 球戯論De ludo globi美論Tota purchra等も知られている。<sup>(11)</sup>

物を作るときに視覚にもとづく創造性が発揮されるが、視覚の働きで、最も重要なことは、視覚による適切なプロポーションを作り出すことである。それが芸術の誕生であり、その作品制作におけるイメージは、人間の視覚と人間の手によるものであるが、精神mensの機能の問題でもある。

彼によると、精神は、模倣することもあるが、フィクションvirtus fingendiすなわちアイデア・イメージを創りだす自由な力を有し、

芸術家は模倣者ではなく生産者になるという。新プラトニズムが台頭してきた時代ではあるが、今日のデザインのような生産的な芸術という見方で、模倣よりもすぐれて創造的なmagis perfectoria quam imitatoriaとあって、生産的な営みを高く評価する。

しかし、彼の、最も注目すべき主張は、人間の自発的活動を重視しながら、神の摂理も同時に肯定しようとするので、神の宇宙創造にたいして、人間の精神と技術による創造は、「第二の神」の仕事となる。

「精神論」でスプーンの形を生産するのは、天然・自然物の形に従う有限芸術と、芸術家の精神のアイデア（アイデア）による無限芸術というモデルで述べている。

あるいは、絵画について、一人の画家が描いた2枚の絵を取り上げ、第1のものは、対象に似るように努めたため生命力の無いものになり、第2のものは、動きを狙ったので生命感是十分出せたが、あまり似ていないものとなった例を挙げている。イメージと生動感が矛盾しつつも似ていなければならないのは、絵画が模倣芸術であるからである。これも人間業の限界であろう。

ドイツでは、自然は神の創った「第二の聖書」といわれたりする。神の創ったものと人間の表象は、人間の無知、限界から、最大の似像である神の子以外に原像は無いことを悟らねばならないという。自然についても、自然美を人間の感覚で尊重するよりも、自然を写す芸術は自然を越えることが出来ないことを認識するべきである。

彼は、神の一性unitatisを説き、充実した「一」は宇宙的な一性と、神の統一性が、宇宙的な一性が多性のうちに凝縮されており、神の統一性をそれぞれの仕方で宿しているという。いわば、神は世界を包含し、世界は神を展開する。

第二の神の創造は、比較論義、有限、無限、等で示すことが出来ず、たとえ完全に見えても、人間の精神の働き以上のものではない。

「いわば、鏡のなかのおぼろげな像」ともい

うが、真意の把握できない謎aenigmaが含まれている。

いずれにしても、人間業では、完全、完璧はありえないことを、考えさせられる。

#### 第4章 芸術における真について

##### ①芸術作品により啓示される美

古くからよく知られる言葉に、17世紀の、ボワローの「真の他に美はない」というのがある。これは、作品の形象や感性的衝動が美しいから真実であるというのではなく、主題の物語り的内容や、フィクションも含めた表現内容や、作品を媒体にして啓示される高次の真実等、作品を越えた自然の理や、人間的現実に共感するときに感じるものである。「真実だけが望まれるのであり、真実はすべてを、作り話をも支配する」と述べ、劇的なことや悍ましい場面でも、見る人の心を楽しませると説明している。<sup>(12)</sup>

19世紀以来、ドイツロマン派やヘーゲル等の説くところ、人間の精神の究極的な顕れを美と見なす傾向から、整合的な全体が真であり、芸術は真理のモデルであり、自然と精神を一つの宇宙に統合する美的宇宙論において、美を理念の実在としての理想とするが、実際、芸術の歴史に照らせば、美は有限な人間の営みとして、真実を離れてはありえない。今世紀はじめ、クローチェは、表現の美学として、人間の純粋な直感が表現されたものが芸術であり、直感の実体は美でもあり、真でもあるという。

あるいは、芸術学的に、心理的内容や、潜在意識も含めた精神機能を解釈学的に究明しようとする立場でも、感覚的真実が直感として尊重されることが多い。

さらに、美意識の問題として、創造的な行動に由来する強い自覚的な美と、鑑賞を基盤とする批判的、論考的な認識の美との比較もあり、究極の原理としては、創造も鑑賞も統一した人間行動と見なし、ただし、人間業を越えた超越者や自然からの光による美の成立

をも考えるべきであろう。

トマスが自然の光だけでは不十分として、神の直接啓示によるlumen supernaturale超自然光を説くのと同系のものであろう。この超越者や自然からの光は、トマスの少し後のDuns Scotusの言う様な、lux aeterna永遠の光であり、神の名や概念だけでなく、新しい信仰の可能性を考慮した、科学的な発想に繋がり、via modernaとして、神の存在や光と、人間の能力、分析能力の厳密な考察に繋がる観点であろう。<sup>(13)</sup>

しかし、恩寵の光も自然の光も、美が形而上学的に神の超自然的な光を原因とする神学的な観念で説かれ、美と真実の同一性や、同源性が、ただ抽象的に述べられてる場合は、芸術の盛衰や、芸術の歴史が重視され、美術史の諸概念や、様式展開法則などが特に重要になる。

神の恩寵や摂理により万人に自明の理のように認識されとしても、真、真実の概念は、超越的なものだけでなく、普遍的な認識をうるように、具体的な諸芸術について、作品の比較考証や分析記述、ときには、科学的な測定や観察、実験的な証明、更に、作品情報の客観的、展開的な処理や交信を必要とすることは当然といえよう。

##### ②芸術に関わる真実：VeritasとAletheia

芸術と真理という課題で、ゼードルマイアーH. Sedlmayrは、美術史、様式史、等の科学的観点を一個の作品にとどまらず、多数作品の比較研究を主張し、形式と内容を現象学的に考察している。作品の形象の美について、

(1)作品が上手に作られていること

(2)うまくテーマや内容が描写されている

ときに、作品は美しいといえるし、(2)だけでも、作品の美は成立しうる、として、悪魔の姿が醜くても、それが見事に描写されていれば美しいという。この際の真実は、対象の姿は醜いが、画は真実そのまま、作品の技巧的な美に関わらず、美しいと認められることになる。

これは、前述のボワローの、美と分離できない真、と基本においては同じであろうが、技術的メリットに関しては、歴史の遷移を考えざるをえない。科学万能とまではいかなくとも、芸術も科学技術的真実と、社会的あるいは精神的な可能性からの美の問題が、真剣に考えられるようになる時代を反映している。(1)は、まさに、作品と作家の技術的メリットが主となり、芸術の完成、完全性、完璧性の問題に呼応するのである。相対的な現実基準と、目標を掲げる、芸術・技術において、人間の技術としての、あるいは、芸術家の生き方としての真実と、そこに顕現される美との総合判断が求められる。

また、芸術に関わる真実の概念として、形式的なveritas真理、は不適當であり、ギリシャ語からくるaletheiaにたち帰って、存在論的真理観を拠り所にすべしとのハイデッガー等の主張もある。

現代の論者、Rapoportによると、芸術に真はありうるかということは、懷古的に普遍性や、絶対性、今まで論じてきた超越的な神のような存在に帰するのではなく、局所的に、site specific真実が顕れる芸術を中心にするべきで、芸術は極めて多様化しており、その特殊性を存在性、実在性を弁えて追求すべきである。(15)

そうなると、ギリシャ古典以来の芸術に関する美や真の存在問題に立ち返るのではなく、ニイチェの唱えるよ永劫回帰ewige Wiederkehr des Gleichenに近い観点で論究することを主張する。あるいは、スコラ哲学のような、すべてを包括する大完全存在、超越存在、絶対者・神を前提とし、美も真も、一つの原理や、理念に帰するのではなく、ニコラウス・クザヌスのように、最大にして、一なるものを仮定するか、絶対多数、絶対多様な芸術創造の現実から、人間に本来備わっている能力や可能性、一つ一つ違う存在の相違性を考察する必要があると見えてくる。

Jacques Deridaの真実と相違との同一観もあり、ポスト・形而上学といわれる現代哲

学の一部にみられる、個別存在の有と実在の再検討も関係するであろう。

Duns ScotusやWilliam Ockhamに帰せられる、此性haecceitas概念も注目されるが、個々の確かな存在と、その認識に、虚像と実像、夢と現実、本物とニセモノ、現実と虚構、ウソとマコト、証明と推測、VirtualとActual記号と実物、隠れた真実と暴かれた真実、可視と不可視事象真実と虚偽、善と悪、洞察と妄想、正と逆、等あげれば切りがないが、時間、空間を越えて絶対と考えられる全存在の中で、ある時に顕れる一つの現象や、精神に生じる真実と、美意識や、美的判断は、個々の責任存在として、違いだけを主張するのは不十分と思われる。

全体の存在、宇宙創始者の力、自然の大きさの下で、第2の神の創造の限界内の人間に可能な真実は、美や善と区分するべきものではなく、時々に必要なに応じていずれかの理念が顕現すると考えるのが自然であろう。

いわば、芸術に関して、技術としての完全性を目標とすると、人間業の限界が明らかになり、超越者を前提とする完全性に照らせば、人間の未完成の営みによる芸術活動の実証的な作品分析や芸術家の存在の問題が矮小なものと思われかねない。

常に大目標に挑戦する人間の果てしなき営みが、真、善、美の理念のうち真と美との関係や共通性を追求する契機とはなるが、さらに、包括的に「完全性」と「美」の関係を考察すること、あるいは、「完全性」と「真実」との関係をスコラ哲学のトマス・アクィナス等や現代の同系の論議を参考にして考察することの意義を考えさせられるのである。

#### 注

(1) Moshe Barasch : Theories of Art (New York Univ Press, 1985) P.18

Götz Pochiat : Geschichte der Aesthetik und Kunsttheorie (DuMont 1986) S.65

Wladyslaw Tatarkiewicz : History of aesthetics v.I (Mouton 1970) P.173

- (2) Moshe Barasch : Theories of Art (New York Univ Press,1985) P.18  
Götz Pochiat : Geschichte der Aesthetik und Kunsttheorie(DuMont 1986) S
- (3) Abraham Moles : Information Theory and Aesthetic Perception (Illinois Univ, Press 1957)
- (4) Royston M. Roberts : Serendipity (John Wiley & Sons1989)
- (5) Götz Pochiat : Geschichte der Aesthetik und Kunsttheorie (DuMont1986) S.134
- (6) Götz Pochiat : Geschichte der Aesthetik und Kunsttheorie (DuMont1986) S.65  
Wladyslaw Tatarkiewicz : History of aesthetics v.II (Mouton 1970)
- (7) Götz Pochiat : Geschichte der Aesthetik und Kunsttheorie (DuMont1986) S.136  
Wladyslaw Tatarkiewicz : History of aesthetics v.I (Mouton 1970)  
Assunt : Die Theorie des Schönen in Mittelalter(Du Mont 1963) S.102~
- (8) Umberto Eco : Aesthetics of Middle Age
- (9) Götz Pochiat : Geschichte der Aesthetik und Kunsttheorie (DuMont1986) S.175  
Wladyslaw Tatarkiewicz : History of aesthetics v.II (Mouton 1970)
- (10) Raimundus Lullus, Opera : Ars Magna Ultima etc. (Frommann)
- (11) Nicolaus Cusanus, Opera : Docta Ignorantia (Lipsiae)  
ニコラウス・クザヌス「知ある無知」 岩崎、大出 訳 創文社
- (12) Nicolas Boileau : L'Art poétique (Garnier) Epitre9 P.137
- (13) Götz Pochiat : Geschichte der Aesthetik und Kunsttheorie (DuMont1986) S.197  
Wladyslaw Tatarkiewicz : History of aesthetics v.I (Mouton 1970)
- (14) Hans Sedlmayr : Kunst und Wahrheit (Maeander 1978) S.153~
- (15) Herman Rapaport : Is there truth in art? (Cornell U.P.1997) P.10~